

# 地理教育で SDGs（持続可能な開発目標）は どう教えればよいのか

－教養科目地理学における大学生の感想からの考察－

西 岡 尚 也\*

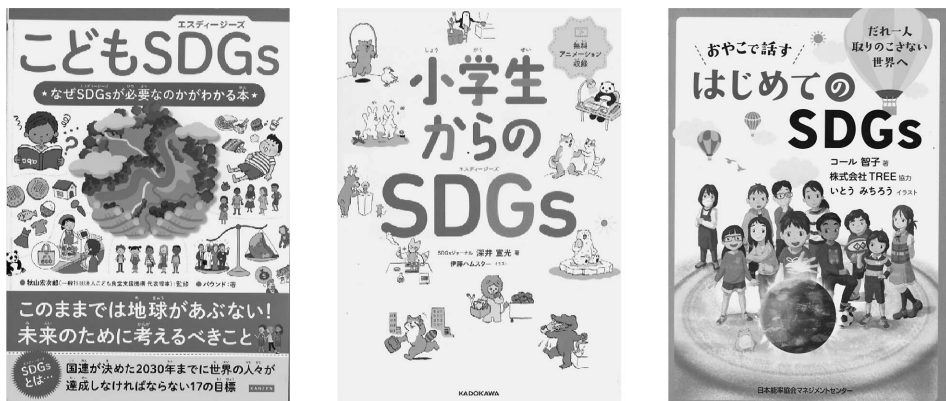
## 摘要

国連の呼びかけで SDGs が学校教育に導入されて来た。教科書には“17 の目標”が掲げられ、小・中学校や高校では社会科地理分野を中心に教育実践や教材研究が報告されている。しかし目標と内容が広範囲にわたるため、実践する教員には負担が大きい。筆者も大学教養科目「地理学」で SDGs にふれてきたが、ポイントが絞りにくいテーマであり苦戦してきた。本稿では受講生（大学生）の感想を整理しながら、今後の SDGs 教育の進むべき方向について考察していきたい。

キーワード：17 の目標、目標のグループ化、大学生の感想、SDGs 概念の検討

## I はじめに

ここ数年書店では SDGs 図書コーナーが設けられるなど、SDGs に関する子ども向け学習書や教材出版がさかんである（第1図）。しかし教育現場に於いては、どれだけの教員がきちんと教材研究をして授業に臨んでいるかは疑問である。とりわけ SDGs 分野では一般大衆や社会人への「入門書」「啓蒙書」が少なく、マスコミ報道も含め社会全体の関心が深まっていない印象を



第1図 小学生を対象にした SDGs 関連図書の例

出典：左から秋山（2020）、深井（2021）、コール智子（2022）の各表紙

\*大阪商業大学公共学部 E-mail：nishioka@daishodai.ac.jp

受ける。また私が担当する大学教育現場でもその傾向が見られ、多くの大学生にとっても SDGs への興味・関心はまだまだ少ないと考えられる。

小稿では、筆者が担当する教養科目「地理学」での事例を紹介しながら<sup>1)</sup>、大学生にどのようにすれば SDGs の意義が伝えられるのかを考えたい。

## II 「17 の目標」をグループ化した講義の展開

筆者はこれまで大学での教養科目「地理学」において、「SDGs 目標 17」(第1表：左側)を紹介しながら、過去の COP 会議ニュース(新聞時事)なども用いて講義を行ってきた。しかしながら「17 の目標」は非常に広範囲で、かつ多岐にわたるので、これをそのまま講義で解説するのは負担が大きい。そこで筆者は、17 の目標を事前に次の①～④の4つのグループに分けて(分類し)教えてきた。

具体的には、①経済格差に関わる目標、②人権にかかわる目標、③環境に関わる目標、④その他：目標達成の是非、がそれである(第1表：右側①～④)。この分類のヒントにしたのは、ストックホルム・レジリエンスセンターが発案した「17 の目標の階層モデル」で、一般には「ウェディングケーキモデル<sup>2)</sup>」と呼ばれている(井田ほか 2022, 7 頁)。

第1表 SDGs17 の目標とそのグループ分け

| SDGs17 の目標                       | ①～④に分類       |
|----------------------------------|--------------|
| 目標 1： <u>貧困をなくそう</u>             | ①経済格差にかかわる目標 |
| 目標 2： <u>飢餓をゼロに</u>              | 〃 〃          |
| 目標 3： <u>すべての人に健康と福祉を</u>        | 〃 〃          |
| 目標 4： <u>質の高い教育をみんなに</u>         | 〃 〃          |
| 目標 5： <u>ジェンダー平等を実現しよう</u>       | ②人権にかかわる目標   |
| 目標 6： <u>安全な水とトイレを世界中に</u>       | ①経済格差にかかわる目標 |
| 目標 7： <u>エネルギーをみんなに、そしてクリーンに</u> | ③環境にかかわる目標   |
| 目標 8： <u>働きがいも経済成長も</u>          | ②人権にかかわる目標   |
| 目標 9： <u>産業と技術革新の基礎をつくろう</u>     | ①経済格差にかかわる目標 |
| 目標 10： <u>人や国の不平等をなくそう</u>       | ②人権にかかわる目標   |
| 目標 11： <u>住み続けられるまちづくりを</u>      | ③環境にかかわる目標   |
| 目標 12： <u>つくる責任つかう責任</u>         | 〃 〃          |
| 目標 13： <u>気候変動に具体的な対策を</u>       | 〃 〃          |
| 目標 14： <u>海の豊かさを守ろう</u>          | 〃 〃          |
| 目標 15： <u>陸の豊かさを守ろう</u>          | 〃 〃          |
| 目標 16： <u>平和と公正をすべての人に</u>       | ②人権にかかわる目標   |
| 目標 17： <u>パートナーシップで目標を達成</u>     | ④その他：目標達成の是非 |

備考：①～④への分類は筆者の考えであり客観的なものではないが、このような分類で教材化へが少しでも容易になると考えている。

(出典：大芝亮ほか(2022)『私たちの公共』清水書院, 148 頁をもとに加筆し筆者作成)

①経済格差にかかわる目標：の講義では、第二次世界大戦の新たな独立国誕生で、「第三世界」と呼ばれる南側「途上国」と、従来の北側「先進国」の格差問題＝南北問題を歴史的、地理的（空間的）に説明した。とりわけ宇宙から見た「夜の日本列島付近（写真）」を用いた講義は、受講生には好評であった（金坂ほか 2020, 154 頁）。

②人権にかかわる目標：の講義では、アフリカ大陸を中心に特にヨーロッパ人の視点から人種差別の歴史をふり返り、奴隷貿易～アパルトヘイト政策の説明を行った。奴隷貿易では『Roots』（テレビドラマ）の一部を視聴してもらった（アレックス・ヘイリー 1977）。

③環境にかかわる目標：講義では、アラル海の縮小、北極海の氷の減少、ツバルにおける海面上昇の「写真・映像など」を使用し講義を展開した（澁澤 2022, 112 頁）。

④その他：目標達成の是非：講義では、SDGs はアリバイ作りのようなものであり、目下の危機から目を背けさせる効果しかない（斎藤 2020, 4 頁）」など、SDGs への批判や反対意見も紹介し、より深く受講生に考えてもらう資料を提供した。

### Ⅲ 大学生の感想から見えてきた 5 つの傾向

SDGs に関わる講義後に自由にも書いてもらった大学生諸君のコメント・感想（総計 220 人）は、次の第 2 表のように、大まかに 5 つに分類「傾向 A～E」できることが分かった<sup>3)</sup>。また以下の（1）～（5）はその具体的な感想の抜粋である<sup>4)</sup>。

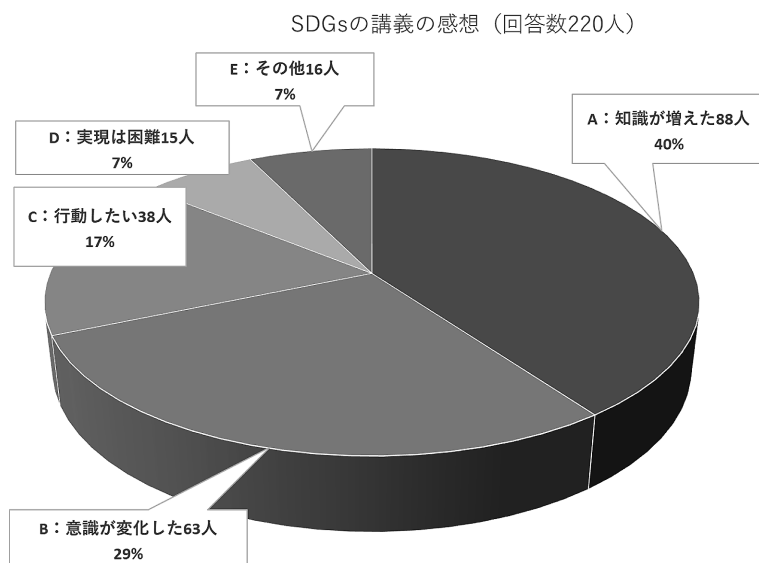
#### （1）傾向 A：「知識がふえた」に分類される感想（15 人の例）

A-1：夜の地球を国際宇宙ステーションから見た写真では、時に暗いところは人口が少なく、経済的にも貧しくてエネルギー消費が少ない。逆に明るいところは、人口が多くて、経済も安定していてエネルギーの消費が多いことがはっきりとわかることを初めて知った。環境問題について森林破壊、砂漠化、サンゴの白化、サヘルの干ばつの深刻化、海の砂漠化が進んでいるので、SDGs の取り組みを世界で広めて環境問題を改善できたらいいなと思った。

A-2：人口が 80 億人近く居ることからこのような問題が発生することがわかった。環境問題

第 2 表 大学教養科目「地理学」で SDGs の講義を受けた感想（回答 220 人）

| 感想の分類                        | 人数（％）       |
|------------------------------|-------------|
| 傾向 A：SDGs に関する知識がふえた。        | 88 人（40.0％） |
| 傾向 B：自分自身の意識が変化した。           | 63 人（28.6％） |
| 傾向 C：自分も何か行動したいと思うようになった。    | 38 人（17.7％） |
| 傾向 D：目標の達成は困難だと思うようになった。     | 15 人（6.8％）  |
| 傾向 E：その他、自分の人生や目標を考えるようになった。 | 16 人（7.3％）  |
| 合計                           | 220 人（100％） |



第2図 SDGs 講義の感想（第2表を資料としてグラフ化：回答 220 人）

では、人口が増える事によって環境が悪化し、砂漠化などの問題が起こっていることを知った。

**A-3：**日本はエネルギーを得ることができているけれど、世界には人口の増加により電気が足りていない問題があることを知った。人口の増加に国や社会の成熟が足りていないことを感じました。問題を解決するには先進国が支援するしかないと思った。

**A-4：**これから先資源は枯渇する可能性が高い。日本は資源がほとんど採れないため、代替エネルギーの開発や省エネが必要とされている。だが、それらが上手く採掘されなく問題視されている。環境では世界全体では、地球温暖化が問題とされている。それらを解決するために気温上昇を 1.5℃ に抑える目標が定められているのを知った。

**A-5：**地球温暖化はどんどん進んでいる。これを抑えるにはエネルギーを再生可能エネルギー、自然エネルギー、風力、太陽光発電に変えれば温室効果ガスになる二酸化炭素は発生しないことを学び、色々な解決法があると思った。

**A-6：**私は大学生になって SDGs という言葉を知り、最近この言葉を聞くことが多くなった。S は Sustainable：持続可能な、D は Development：開発、G は Goals「s」：目標で「持続可能な開発目標」、これからもずっと続いていく。よりよい世界を作るための目標で 17 個のゴールが設定されている。この目標はすぐには達成できないと思うが徐々に達成して良い世界になれば良いと私も強く思った。

**A-7：**講義を受けて世界の環境問題や SDGs について知り、学ぶことかまできた。衛星から見た地球は国の発展具合や、山や川や海の形を見ることができとてもすごいと思った。環境問題では私が生きているうちに地球が変わっていき、その変化でどう変わるか知ることができた。

**A-8：**講義ではエネルギー問題と環境問題について学んだ。衛星から見た時に、暗いところは人口が少なくて経済的にも貧しくてエネルギー消費が少ない。逆に明るいところは、人口が多く

経済も安定していてエネルギーの消費が多いことがはっきりとわかることを初めて知った。これは人口の多さと関係しており、中国やインドでは明かりが多く、夜の北朝鮮では、ほぼ明かりが無かった。また環境問題について森林破壊、砂漠化、サンゴの白化、サヘル地帯の干ばつの深刻化、海の砂漠化が進んでいるので、SDGs の取り組みを世界で広めて環境問題を改善できたいなと思った。

**A-9：**最近 SDGs という単語をよく聞くんが、SDGs とは Sustainable Development Goals（自然環境はそのまま社会発展させることを、将来においても継続していくことができる目標）であることを学習した。現代の地球では自然環境の破壊を人間が行っており、それにより地球温暖化や大気汚染、水質汚染などの問題が発生しており、人間が生活できなくなる環境になってしまうことが理解できた。

**A-10：**SDGs とは「Sustainable Development Goals」を略したもので、日本語では「持続可能な開発目標」と訳し、国際社会共通の目標であることを知った。SDGs が目指すのは、世界が直面している課題の解決で、企業がこの課題解決に取り組むことにより、新しいビジネスチャンスの創出につながる。17 の目標に対し、自社の技術やサービスを用いて解決する新規事業や、他業種と足りない技術を補う協働などの事業展開が可能なることを知った。

**A-11：**夜の地球を空から見て、明かりの具合で人口分布を表す写真があったが、日本は明るい所が多いと思った。講義の中で出てきた「地球の定員」という言葉にハッとさせられた。今の日本は人口が年々減っているが、世界全体でみると人口はどんどん増えており、住む場所や食料などが足りない恐れが出てくる。足りなくなってくると、地球は定員オーバーしたことになるって、危機的な状態になると考えられる。

**A-12：**世界のエネルギー問題と世界の環境問題について学び、人工衛星から見た夜の地球がすごく綺麗で驚いた。日本は少子高齢化だが、世界の人口は 2050 年には 100 億人になると聞いて驚いた。世界の環境問題は、森林破壊・砂漠化・サンゴの白化などの問題があって解決すべき問題がたくさんあると思った。

**A-13：**今の地球は自然破壊や地球温暖化が問題視されており、地球温暖化などはどんどん進んでいる。今年は日本でも 5 月頃から非常に暑い気温になり、これは地球温暖化のせいだと考えるようになった。このように積み重なる自然破壊や環境汚染により地球が悲鳴をあげているため、この問題は 1 秒でも早く解決するべきと考える。

**A-14：**SDGs という単語が Sustainable Development Goals という略称だったのを初めて知り、「自然環境はそのまま社会発展させることを、将来においても継続していくことができる目標」という意味を初めて知った。

**A-15：**環境破壊の原因は、人間ということはもちろん分かっていたが、「地球の定員のオーバー」という表現にすごく納得した。

## (2) 傾向 B : 「意識が変化した」に分類される感想 (12 人の例)

**B-1 :** 世界には日本とは違いエネルギーの供給が追いついていない国や、電気代が払えない人ことを知った。そういった格差をなくすため、最近 SDGs という考え方が話題になっている。できるかどうかではなく、やろうとする心を持つだけでも変わっていくと思うので、未来を生きていく人たちのために、私も環境問題に気をつけて生きていきたい。

**B-2 :** SDGs とは持続可能な開発への目標であり、特にエネルギー問題に関心を高める必要を感じた。私達が生活していく上でなくてはならないものになっていく。再生可能なエネルギーが重要である社会になった。地球温暖化など、環境問題に我々人類が向き合わなければならない問題である。今回の講義を受けて、もう一度自分自身の考え方や行動を見つめ直すことが必要だと思った。

**B-3 :** 世界中で SDGs を目標として掲げているが、持続可能な社会をめざせば、大量のエネルギー資源を使えなくなり、私たちの生活にも影響が出てくる危険があると思った。それでも日本は恵まれている国であり、他の国では電気が通らなくて貧困に苦しむ人もいる。豊かなこの日本で生活できていることに感謝したいと思った。

**B-4 :** 講義中に衛星から見た「夜の地球」は場所によって明るかったり暗かったり。地域の特徴が表れていたと同時に、とてもきれいだった。人間は自然界に大きな影響を与えていることを学んだ。持続可能な社会を意識していくことが大切だと思った。

**B-5 :** 環境問題が起こる理由としては人口がどんどん増加しているために、木を伐採したりなど環境破壊が起きていると知った。その他にもエアコン等の利用の仕方の影響あると知り、わたし自身も気をつける部分があるなと感じた。さまざまな発電方法があり、場所に応じたその方法ごとにメリット、デメリットがあることを知りさらに自分で勉強したいと思った。

**B-6 :** 人工衛星から夜の地球を見たとき、東アジアやヨーロッパ、アメリカなど先進国を中心に明るくなっており、それだけエネルギーを消費していることが分かった。石油や石炭などの化石燃料は、一定の地域でしか産出できず量にも限りがある。それを輸送する過程で二酸化炭素が排出され良くない面も多いと思った。また、森林伐採や砂漠化を他人事にせず行動することで、きれいな地球を未来へ残していくべきだと感じた。

**B-7 :** 講義を受けて、私たちが今大学に通えていることは当たり前のことではないと改めて分かった。多くの他国では未だに十分な電力がなく、生活している人もいると知り、毎日の生活が無駄にしている場合ではないと考えさせられるきっかけになった。また、エネルギーについても学び、人口増加で限られた資源をできるだけ節約し、クリーンなエネルギーに変えていく必要があると考えた。地球自体にも一生があり、私たちが 1 度きりの人生を悔いなく終われるように一分一秒を大事にしていきたいと思う。

**B-8 :** 今回の講義で資源が有限であること、環境が破壊されることは避けられず、持続可能ではないということを再認識した。日本は SDGs を考えられるほど平和で余裕がある国であるが、それだけで満足せず、世界には貧困で学びを受けられず、環境や資源のことについて考える余裕

のない人々がいるということを、忘れないようにしなければならないと思った。人間全員が共通意識をもって本気で取り組まない限り、地球の破壊は食い止められないため、地球に住む一人の人間としての自覚を持つと思う。

**B-9：**今回の講義を通して、地球規模の課題について学ぶことができた。SDGs を進めていく一方でそれすらも知らない人たち、実行できない人たちがいるのに世界で進めることができるのかという話を聞いて、確かにその通りだと思った。途上国の「できない人たち」を、先進国の「できる人たち」が支えていくこと、できる人が手を差し伸べることが重要だと強く感じた。また、人間が放牧や森林の伐採をしたことで、だんだん砂漠が増えていること、海面上昇や水温上昇によるサンゴの白化など地球環境がどんどん悪化していく中で、真剣に「地球の定員」を考えなくてはいけないと学び、他人事ではなくて自分のこととして目を向ける必要があると考えさせられた。

**B-10：**講義を聞いて日本がどれだけ豊かな国なのかを実感することができた。初めは日本でしか生きたことの無い私には、これが普通だと感じていた。どこにでも電気が通っていて停電も少ない。また、義務教育がありみんな勉強を学ぶことが出来るなどと思っていた点である。地球で砂漠が増えていることは、私たち人類が生きるために行ったことがきっかけであることを初めて知った。人類が住む場所を確保するために森を伐採し、家畜を育てるために草原を減らして来た。過去の栄えた文明地域もこのことがきっかけで今は砂漠になっていると知り納得した。

**B-11：**今回の講義で世界では、「100 人に 1 人しか大学に通うことができない」ことに驚いた。私もその中の一人だと思うと改めて感謝しなければいけないと思う。また日本がほかの国々と比べて豊かなことにも感謝しないといけないと思った。

**B-12：**日本は他の国と比べてやはり安全で豊かな国だということがわかった。日本人は、それが当たり前のように暮らしている。しかし、今でも世界のどこかでは食事ができなくて苦しんでいる、私たちより幼い子供がいること忘れてはならないと思った。私は、この講義を通して今平和に暮らせていることや、当たり前のように食事ができていることに感謝しないといけないことに、気付くことができた。

### (3) 傾向 C：「行動を起こしたい」に分類される感想（11 人の例）

**C-1：**講義ではエネルギー、環境問題について学びました。エネルギー資源問題では、私たちはエネルギー資源の消費が多いけど、生産は少なくてもこのままだとエネルギーが枯渇するというのを聞き、私も節電などの省エネ対策、自分でできることをやろうと思う。

**C-2：**今回の講義では SDGs（持続可能な開発目標）について学んだ。私は大学に入学してから SDGs という単語を聞く回数が増え、地球規模の問題について考えている。持続可能な社会にするには、どうしても汚染物質が出てしまう。これにより、地球温暖化が進み、自然や地球が壊されていく。人間だけでなく地球にいる動物も絶滅すると思う。このような地球規模の問題を解決できるように、大学で学んで社会に貢献したいと思う。

**C-3:** エネルギー問題では、夜の地球を宇宙から見ると日本を含む先進国では大量にエネルギーを消費しているため明るい、貧しい国などではあまりエネルギーが消費されていないので暗いことが分かった。また人口の増加に電気の供給が追いつかず、停電してしまう地域が世界にはある。環境問題では、森林破壊や砂漠化、地球温暖化が進行している。人間の活動により、森林が伐採され焼かれている。森林の生き物のたちの命にも我々人間が非常に関わっている。さらに地球温暖化が進行することで地球全体の気温が上昇し、自然や生き物、して我々人間にも深刻な問題を与えると改めて理解できた。エネルギー問題や環境問題を解決するためには、何をすればよいかをしっかりと考え、それを実行に移すことが大切だと思った。

**C-4:** ここ数年 SDGs についての活動を日本でもよく聞くようになった。日本ではエネルギー資源（地下資源）がほとんど取れないので、代替エネルギーの開発や省エネが必要となっている。そのためには一人一人の協力が必要であるので、私もできるだけ省エネに協力していきたい。そして、自分の家族や友達にも世界を良くするために、省エネが必要だという事を伝えて、実行させなければならないと思った。

**C-5:** 最近 SDGs という言葉をよくテレビのニュースや、他の講義でも聞くことがふえた。「持続可能な開発目標」という用語だけを聞けば難しく感じるが、勉強していくと納得できた。豊かな日本で普通の生活を送っていると、世界が抱えている問題になかなか目が向かない人が多いと思う。この講義では改めて考えるきっかけになった。2030 年までに達成するために、今できることをやっていきたいと考えるようになった。

**C-6:** 地理学を受講して、レポート課題に毎週ニュースを記載する課題があった。日常のニュースでも、貧困やエネルギー問題など、地球規模の問題に間接的に結びつくニュースが多い事に気付いた。国連が掲げる SDGs など無理な話だと思って諦観していたが、講義を聴いてからは、個人単位で出来る事を考えて実践したいと思うようになった。

**C-7:** エネルギー資源を輸入に頼っていると、国際情勢などによって、安定的にエネルギーが確保できないという問題がある。もし海外から輸入できなくなった時には、日本の経済活動や市民生活のが、全部止まってしまうと考えたらとても怖くなった。したがって、再生可能エネルギーの利用率が高い新電力会社を利用することも、小さな対策になるのではないかなと思うようになった。

**C-8:** SDGs の意味は、世界中にある環境問題・差別・貧困・人権問題といった課題を、世界のみんなで 2030 年までに解決しようという目標であるということを知った。私も環境問題に少しでも貢献できるよう、小さなことから頑張っていきたいと思う。

**C-9:** 今回の講義では、エネルギー・資源問題、環境問題などの地球環境問題と人口問題について学んだ。高校でも SDGs への取り組みが授業であったので、講義でこの単語が出てきた時には、やっぱり大切なんだと改めて思った。これからの環境を守る上で、今から簡単なことから取り組んでいくことが、私たちにできることだし、やるべき事だと思った。

**C-10:** 今の自分は大学生という存在で、恵まれた環境で暮らし感謝しないといけないと感じ



た。それでもこの贅沢な生活をずっと続けてしまうと、日本だけでなく世界が減びてしまうことになると思うので、自分出来る節水や節電などの小さな事から初めていきたいと思う。

**C-11：**世界では大学まで進学できるのは、「ほぼ 100 人に 1 人しかいない」ということを改めて認識した。有難い恵まれた環境にいることに感謝したい。現在地球全体で持続可能な環境作りがテーマとなっている。我々人間はこれ以上少しでも多くの環境破壊を防ぐために考え行動しなければならないと思う。一人一人が自覚するには時間がかかるかもしれない。また一人一人のできる行動は少しかもしれないが、環境の保護に取組たいと感じた。

#### (4) 傾向 D：「目標の達成は困難だ」に分類される感想例（7 人の例）

**D-1：**夜の地球の写真（電気の灯りの分布）を見れば、経済の発展などもすぐにわかることができ、とても驚いた。日本では人口が減少しているが、世界では人口が増加しているという真逆の事が起きていることに、この動画を見るまで気づかなかった。またサンゴは植物ではなく動物だという事を初めて知った。私たちが大学に通えるのは日本という恵まれた国に生まれたからで、これから色々な事に勉強していこうと思う。SDGs は確かに理想の目標であるが、現実的には達成は厳しいと思った。

**D-2：**森林の伐採や砂漠化、海水温上昇によるサンゴの消滅などの環境問題は長い間言われ続けている問題であるが、あまり改善されてないと感じた。SDGs は環境問題に人々の関心を集めるのには役に立つが、具体的に実現可能かはわからないと思う。

**D-3：**今日の授業でエネルギー問題と環境問題について学んだ。国連は持続可能な社会の目標として SDGs を掲げているが、簡単には達成できるとは到底思えない。途上国では車においてはガソリン車しか使っていないし、電気も満足に使えない。こういった状況で先進国を基準とした目標にするのは間違いだと思う。やるのであれば、途上国を基準に考え、それを中心とした枠組みを構築しなければいつまで経っても目標は達成できない。

**D-4：**今回の講義ではエネルギー問題、環境問題について学ぶことができた。今でも電力の供給が追いつかず停電が頻繁に発生する地域があることに驚いた。最近、日本でも電力不足問題があったので身近に感じる課題だった。持続可能な社会を実現していくのは難しいと思うが、将来のことも考えて地道に解決しなければならない問題だと思った。

**D-5：**講義では砂漠化、汚染物質などの地球環境問題について学んだ。アマゾン川周辺では全世界の 3 分の 1 を占める生き物が暮らしているとされるが、熱帯林の伐採が行われている。また、アフリカ大陸のサヘルと呼ばれる地域では、家畜などに食べられ、二度と草が生えない地域が増えている。さらに北極海では海水の減少が進むなど温暖化による影響も大きくなっている事を知った。日本は水や電気などの環境が整っていて、恵まれていると思った。もはや SDGs は達成が困難だが、少しでも自分で出来る事に取り組んで、「環境問題が進むのを遅らせる」ことで、社会貢献をしていきたいと思った。

**D-6：**地球の定員について考えさせられた。日本では人口は減少しているが、世界的に見ると

増加している。そのため居住区を作ろうとすると自然を破壊する必要がある。しかし自然を破壊すれば温暖化を促進してしまう。SDGs は実現が難しい目標だと思う。

**D-7:** 環境問題は最大の課題だと思う。二酸化炭素が多くなっているが、それと同時に便利な生活を送れているわけでもある。便利だけではダメだと思うので便利の中で環境にやさしいこともしていかないダメだと思う。だがその問題はとても難しいことになってくると思う。どっちらも取るとなったら、今度は多額のお金が発生することになってしまうだろう。したがってこのような目標達成はとても難しいと思う。

#### (5) 傾向 E: 「その他」 に分類される感想 (10 人の例)

**E-1:** エネルギーは使えば使うほど足りなくなっていくが、これは日本だけの問題でなく世界共通の問題であるので、国と国が協力し合って解決できたらいいと思った。私は何もできそうにないが、SDGs の目標達成がうまくいくことを願っている。

**E-2:** 日本では少子高齢化が進んでおり人口が減少しているが、世界全体では人口が増え続けていることを知った。また今の世界の総人口は約 80 億人だが、2050 年になると 100 億人にまで増えると知りとても驚いた。そこまで世界人口が増え続けると、さらに環境問題や食糧問題が深刻化するので心配になった。

**E-3:** 私は SDGs について名称とある程度の情報は知っていたが、深くは知らなかった。今回の講義で、あらためて深く知ることができた。エネルギー、資源については本当に深刻な問題なんだと思った。この問題を解決しなければ、地球全体がうまく回らなくなるのも時間の問題かもしれない。私には何もできないが、そのために色々な人が動いて解決に向かって行くことを期待したい。

**E-4:** 環境問題の砂漠化や森林破壊、海の砂漠化、これらは全て人間によるものであり、経済活動をする前にこれらの問題に対して、解決策を持つことを義務とするような国際的な法律を作ることが、必要だと私は考えた。「地球の定員」という言葉があることは知らなかった。この言葉を正しく理解した上で世間の常識的な概念として浸透させることが、人口増加を止める解決策の一つになると考える。

**E-5:** SDGs などを掲げても、環境崩壊は止められずいつかは滅びてしまうことになるかと改めて思いました。またある国では小学校に通えずにその日食べるものにも苦勞する人がいると知ったとき、現在普通に大学に通えている自分は恵まれていると思った。そして目標をもってトライしていかないと変化はないと思った。人生が何度も繰り返しできるならいいが、そうではないので、後悔のない大学生活を送りたいと改めて思った。

**E-6:** 地球には寿命があり永久には持続可能な社会はできないが、資源の枯渇を遅らせる努力をすることが大事だと学んだ。また全地球の人口は、80 億人ぐらいになっていて、あともう数年で 100 億人になると知った。そして「地球の定員」を考える地理的な広い視野を持つことが大事だと学んだ。また地球の一生も、私たちの人生も 1 度きりというのを心の隅に置いて、生きて

いきたいと考えるようになった。

**E-7：**今回の講義では日本に住んでいる私たちがどれほど恵まれているか分った。世界では「100 人に 1 人」しか大学に進学することができない。一方、日本には適当に大学に来て遊ぶ人もたくさんはいる。大学に行けていることが普通だと思わないで欲しい。私の人生は一度きりなので、自分の目標や夢を実現できるように過ごしていきたい。

**E-8：**講義を受けて、私が感じたのは日本という国の豊かさと、世界中の国が日本と同じように豊かだとは限らないことを知った。世界では 100 人中 1 人しか大学に行けないという事実にも驚いた。人口がもうすぐ 100 億人を超えてしまうのではないかという問題も出てきた。人が増えるというのは、その分資源を費やすということで、それは同時に化石燃料などを使った火力発電や、ゴミの燃焼の回数が増えることでもある。そうなれば、地球はより温暖化が進み、気候変動が起きてしまい、徐々に地球と人類以外の生物は、人間のエゴによって蝕まれているのだと改めて感じた。かけがいのない私たちの地球の一生も、人間の人生と同じで一度きりである。SDGs とは、結局一人の人間として悔いの残らないようにするということだと思うようになった。

**E-9：**SDGs の講義では、地球環境と人口の増加について学んだ。大学への就学率では世界では 100 人に 1 人しか通うことができないと学んだ。自分はその 1 人だと知り両親や家族には感謝しないといけないと思った。地球環境については、今でも電気が通っていない国があり、明かりをつけるのにランプなどを使っているなどのニュースを見たことがあり、自分は日本に生まれてとても環境に恵まれていると思う。世界の環境や人々の生活について学習し、他国との違いなどを改めて知ることができ良かった。

**E-10：**今までの講義の内容や、今回の講義を聞いて日本という国がどれだけ経済発展していて、どれだけ恵まれているかということを再確認した。環境問題では、砂漠化、森林破壊、地球温暖化による北極海の氷が溶けていき、海の水位が高くなっていることなどの問題は全部人間の責任だと知った。そして私達が、今不満なく住んでいる環境があるのは、今まで自然を壊したからだ。この地球という環境があるのはどれほど幸せのことかを知った上で、これからは環境問題について考えていかなければいけないと思う。SDGs には、本気で全世界が取り組んで行かないと解決しない問題だと思うようになった。

#### (6) 大学生の感想から何がわかってきたか。

(1)～(5) にあげた、合計 220 名の大学生に書いてもらった「教養科目地理学での SDGs の感想」を、読み説くことで次のような課題が明らかになってきた。

「傾向 A：知識がふえた (40%)」→「傾向 B：意識が変化した (63%)」→「傾向 C：行動したい (38%)」という、一連の流れがあることがわかった。この結果 SDGs に代表される「地球規模の課題解決」のためには「知識理解」「意識変化」そして「行動する」必要性があることを、受講生諸君にはある程度伝えられたと思う。

さらに「傾向 C：行動をしたい」という若者を増やすためには、すでに「行動」を実施してい

る、「先輩の事例」を取り上げて紹介して行きたい<sup>5)</sup>。

例えば筆者の経験では、アフガニスタンで用水路建設をした「ペシャワール会の活動紹介」の講義は、受講生の反応が良かった（中村 2007）。今後はこのような教材を増やしていきたい。

しかしながら、その一方で大学生の感想には、残念だが「傾向 D：目標実現は困難（6.8%）」と考える学生もみられた。これに関しては、「人間は地球全体のことを思うことができる唯一の生きもの（稲盛 2001, 81 頁）」である。唯一の生き物である以上、どんなに SDGs 目標実現が困難だとしても、現時点でそれを放棄することはできない。なぜなら「人類には責任がある」からである。

また「傾向 D：その他」で注目したいのは、「大学生として学べることへの感謝」や「E：その他（地球の一生：終焉）」まで考える、画期的な創造性のある「意見」をあげているものがある。このような「傾向 D」や「傾向 E」の学生諸君の反応にも十分に伝えていく教材研究が必要である。

#### IV 地球表面地域ごとの目標達成レベルを考える。

ここまで、「17の目標」を①～④に分類（第1表）しながら、“地球全体を一つの対象”として均一にとらえた視点からの考察をしてきた。しかしながらこれでは「地理教育」の手法としては不十分である。なぜなら地球表面の地域・場所ごとにおいて「17の目標達成度」は、当然異なるからである。そこで筆者は「地球表面の地域別目標達成度」についての教材化を試みた。

第3表ではそれを簡潔にまとめて表記した。ただし第3表は「試作品」であって不十分な点も多く含まれる。しかしながら筆者の意図するところは、「17の目標」を地球表面を地域区分し、地域ごとに比較するような教材化が、地理教育には必要であることを主張したいからである。したがって今後はこの「第3表」をさらに工夫し、学校現場における SDGs 学習に活用できるようにしていきたい。

#### V SDGs の概念を検討する

日本では国連が唱える SDGs の語句内の「Sustainable」を「持続可能」と翻訳し、この用語が小中学校、高校、大学の教育現場でも頻繁に用いられている。けれども私たちが住む地球は「持続不可能な惑星」である。

仏教には「万物流転」という用語がある。すべてのものは必ず滅び、何一つとして永遠・不変・常住なものはないとされる。この視点に立てば、地球を「持続可能な開発」の状態にするには、そもそも無理がある。私たち人間は「死＝避けようのない最後」が待っていることを知り「死に直面しながら生きる」からこそ、一度の人生を「命を大切に、有意義に生きよう」とするエネルギーが発生する。

第3表 「SDGs17の目標」を、「地域別の達成レベル」で考えてみよう  
出典：コール智子（2022，別冊3頁）をもとに，加筆して筆者が作成。

|   |  |             |                  |                       |        |             |                       |        |                     |  |        |
|---|--|-------------|------------------|-----------------------|--------|-------------|-----------------------|--------|---------------------|--|--------|
| 考え方   | 地域ごとにみた、現時点での目標の達成レベルと、目標実現後の恩恵の程度<br>①それぞれの目標は、現時点でどの程度目標を達成しているのか（達成程度の地域差） ②<br>その目標が実現すれば、その地域ではどれぐらい恩恵を受けるか（恩恵の地域差）   |             |                  |                       |        |             |                       |        |                     |  |        |
| 凡例  | ●：まだ目標達成度が非常に低く、目標実現で将来大きな恩恵を受ける地域といえる。○：<br>目標達成は中程度であり、目標実現でさらにある程度の恩恵を受ける地域といえる。△：<br>ある程度目標達成がみられ、目標実現してもあまり恩恵をうけない地域といえる。×：<br>かなりの程度目標が達成されていて、将来目標実現しても恩恵が少ない地域である。－：判<br>断できない項目（南極には国家や都市域がない。目標17はすべてに当てはまる） |             |                  |                       |        |             |                       |        |                     |  |        |
| 表の見方・ポイント：それぞれの目標の開発の対<br>象が、人類社会なのか地球全体なのか。この中に人<br>類社会だけを持続可能にしようというような経済<br>目標が含まれていないか。もしそうなら、地球環境<br>存続のためには、人類は不要になり、人類が滅亡し<br>た方が地球にはプラスになってしまう。 |  | ア<br>ジ<br>ア | ア<br>フ<br>リ<br>カ | ヨ<br>ー<br>ロ<br>ッ<br>パ | 北<br>米 | 中<br>南<br>米 | オ<br>セ<br>ア<br>ニ<br>ア | 南<br>極 | 何を持続<br>可能にす<br>るのか |  |        |
|   |  |             |                  |                       |        |             |                       |        | 人<br>類              |  | 地<br>球 |
| 1   | 貧困をなくそう  | ●           | ●                | ×                     | ×      | ○           | △                     | －      | ◎                   |  |        |
| 2   | 飢餓をゼロに   | ●           | ●                | ×                     | ×      | ○           | △                     | －      | ◎                   |  |        |
| 3   | 全ての人に健康と福祉を  | ●           | ●                | △                     | ○      | ●           | △                     | －      | ◎                   |  |        |
| 4   | 質の高い教育をみんなに  | ●           | ●                | ×                     | ×      | ●           | ○                     | －      | ◎                   |  |        |
| 5   | ジェンダー平等を実現しよう  | ●           | ●                | △                     | △      | ○           | △                     | －      | ◎                   |  |        |
| 6   | 安全な水とトイレを世界中に  | ●           | ●                | ×                     | ×      | ●           | △                     | △      | ◎                   |  |        |
| 7   | エネルギーをみんなにそしてクリーンに   | ●           | ●                | ×                     | △      | ○           | ●                     | △      | ◎                   |  |        |
| 8   | 働きがいも経済成長も   | ●           | ●                | ×                     | ×      | ●           | ○                     | －      | ◎                   |  |        |
| 9   | 産業と技術革新の基盤をつくろう  | ●           | ●                | △                     | △      | ●           | ○                     | －      | ◎                   |  |        |
| 10  | 人や国の不平等をなくそう   | ●           | ●                | ○                     | ○      | ●           | ○                     | －      | ◎                   |  |        |
| 11  | 住み続けられる町づくりを   | ○           | ●                | ×                     | ×      | ●           | △                     | －      | ◎                   |  |        |
| 12  | つくる責任つかう責任   | ○           | ○                | ●                     | ●      | ○           | ○                     | △      | ◎                   |  |        |
| 13  | 気候変動に具体的な対策を   | ●           | ●                | ●                     | ●      | ●           | ●                     | ●      |                     |  | ◎      |
| 14  | 海の豊かさを守ろう  | ●           | ●                | ●                     | ●      | ●           | ●                     | ●      |                     |  | ◎      |
| 15  | 陸の豊かさを守ろう  | ●           | ●                | ●                     | ●      | ●           | ●                     | ●      |                     |  | ◎      |
| 16  | 平和と公正をすべての人に   | ●           | ●                | ○                     | ○      | ●           | ●                     | ●      |                     |  | ◎      |
| 17  | パートナーシップで目標を達成しよう  | －           | －                | －                     | －      | －           | －                     | －      | ◎                   |  | ◎      |

備考：表中の●○△×は、筆者個人の考えであり厳密な基準で判断したものではない。また人類と地球の欄に記入した◎も同様である。これらは世界各地における「目標達成水準には地域差」を考えるきっかけとほしい。地域名の「北米」はアングロアメリカ地域（カナダとアメリカ合衆国）、中南米はラテンアメリカ地域を意味する。

同様に地球・太陽・宇宙にも必ず死（終焉）が訪れるから、「地球全ての生命を大切にしよう」「未来に美しい環境を残そう」という意識が生まれるのである。したがって SDGs を学ぶ前に「地球の一生（誕生～終焉）」を、学習者に正しく伝える必要がある。

また Sustainable には「持続」のほかに「持ちこたえられる」の意味がある（第3図）。これをそのまま信じて、学習者が「地球には限界がなく」さまざまな課題が発生しても、それらを「限りなく持ちこたえられる」と、とらえてしまえば大きな過ちである。

人間の傲慢な振る舞い＝大量生産・大量消費に、「地球が持ちこたえられない」から、さまざまな課題が噴出したのである。ゆえに地球は、人類というたったひとつ生命体の活動にすら、「耐えられない」「持続しない」「持ちこたえられない」小さな惑星、弱い存在なのである。

これらのことを教えないで、「17の目標」を紹介して解説するだけでは、学習者（児童・生徒・学生）に正しい科学知識が伝わらず、「地球環境は永続できる」「地球には限界がない」そして「人間には何でもできる」という「誤解」を植え付けてしまう危険がある。

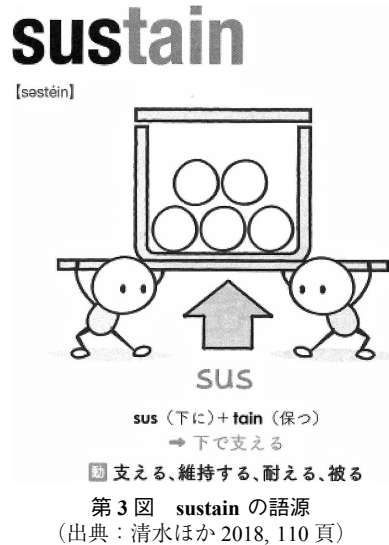
地理学が「空間科学」である以上、科学的に正確な空間認識の上に立った地理教育が必要になってくる。したがって地理教育分野で SDGs 学習を取り上げる前提として、このような正しい世界認識をしっかりと押さえておきたい。

このような教育者と学習者が共通した世界認識に立つことで、“SDGs 学習と地理教育の連携”が可能になると考えられる。したがって「SDGs 17の目標」の解説の前に、次の①～③の「共通理解」をしっかりと教える必要がある（第4表）。

第4表 SDGs 学習と地理教育の連携に必要な共通理解（著者作成）

- |   |
|---|
| <p>①そもそも地球は「持続できない存在である」＝宇宙にも誕生～終焉がある。</p> <p>②今地球環境は「CO<sub>2</sub>増大」で温暖化の危機にある。その責任は全て人間にある。</p> <p>③SDGs17の目標では、「気候変動対策」が最優先されなければならない。</p> |
|---|

この結果、今後の地理教育においては「新たな世界観」や「生き方」にまで迫る SDGs 分野の教育実践が可能になり、地理教育の SDGs 学習に大きく貢献できる可能性が、拡大すると考えられる。



## VI まとめと今後の課題

本稿では最初に第Ⅱ章で、SDGs 学習における“17 の目標”をグループ分けすること複雑な目標の単純化を考えてみた。次に第Ⅲ章では、筆者の講義を受講した大学生に書いてもらった「教養科目地理学での SDGs の感想」を、読み説くことで課題を明らかにしようとした。合計 220 名の大学生の感想では「傾向 A：知識がふえた（40%）」→「傾向 B：意識が変化した（63%）」→「傾向 C：行動をしたい（38%）」という、一連の流れがあることがわかった。この結果 SDGs に代表される「地球規模の課題解決」のためには「知識理解」「意識変化」そして「行動する」必要があることを、受講生諸君にはある程度伝えられたと思う。

また第Ⅳ章では、「17 の目標」対象としての地球全体を単純均一にとらえるのではなく、地理教育の手法を用いた“地域・場所ごとの目標達成度レベルの比較”の考慮する教材化の必要性を訴えた。そして第Ⅴ章においては、SDGs の語句内の“Sustainable”単純に「持続可能な」というように翻訳することが、誤りであるという意見を述べた。

さらに今後将来に向けて地理教育分野、SDGs を教材に下に向けては、第Ⅲ章で「傾向 C：行動をしたい」という若者を増やすためには、すでに「行動」を実施している、「先輩の事例」を取り上げて紹介して行きたい<sup>5)</sup>。

例えば筆者の経験では、アフガニスタンで用水路建設をした「ペシャワール会の活動紹介」の講義は、受講生の反応が良かった（中村 2007）。今後はこのような「生き方」に迫ることができる教材を発掘し増やしていきたい。

しかしながら、その一方で大学生の感想には、残念ながら「傾向 D：目標実現は困難（6.8%）」と考える学生もみられた。これに関しては、「人間は地球全体のことを思うことができる唯一の生きもの（稲盛 2001, 81 頁）」である。唯一の生き物である以上、どんなに SDGs 目標実現が困難だとしても、現時点でそれを放棄することはできない。なぜなら「人類には責任がある」からであるということに触れてきた。

また「傾向 E：その他に分類される感想」で注目したいのは、「ゆたかな日本に生まれ大学生で学べることへの感謝」や「地球の一生も人間の人生と同じで一度きりである」、「SDGs とは結局一人の人間として悔いの残らないようにすることだ」というような、人生観や生き方にまで迫る感想が見られたのは、この講義を実施して良かったと考えている。今後はこのような「傾向 D, E」の学生諸君の要望にも応えていく教材研究・教材開発が緊急に必要であると、筆者は考えている。

とりわけ、地球温暖化に伴う環境問題では「待ったなし」である。ただし、この「待ったなし」の緊急度や優先順位は、地球全体で「同一」と考えてしまうのはよくない。なぜなら地球表面における地域差による「緊急度」が異なるからである（第 3 表）。したがって地理学・地理教育では世界地図を用いながら、第 3 表で示したような、“地域ごとの課題”や“地球表面（地域）

の達成レベルの地域差”にもっと視点を当てる必要がある。この点に関しては、別の機会にさらなる考察を行ってきたい。

## 追記

本稿は、拙著 (2023) 「SDGs (持続可能な開発目標) を地理教育でどう教えるのか—大学生の感想からの考察—」 (大阪商業大学教職課程研究紀要, 第6巻第1号: 通号6号, 25~37頁) を骨子として、筆者が全国地理教育学会第17回大会 (2023年10月22日, 於: 大阪商業大学) での一般研究口答発表「持続しない地球でSDGsを教材にする意味を考える—世界観・生き方まで迫る地理教育をめざして—」の内容をプラスし新たに再構成したものである。

## 謝辞

地理学Ⅰ (2022年度前期) 講義を受講し、「講義の感想文」を書いてくれた大阪商業大学の学生諸君に感謝します。

## 注

- 1) 筆者は2012年度から大阪商業大学で、教養科目「地理学Ⅰ (前期15回)」「地理学Ⅱ (後期15回)」 (一コマ90分間: 受講生は毎年約200~250人) を担当してきた。とりわけ2015年以降はSDGs (持続可能な国連開発目標) を、重点的に講義で取りあげている。
- なお小稿で紹介した「大学生の感想」は、地理学Ⅰ (前期第15回終了時, 2023年7月) 受講生に書いてもらった「前期15回の講義の感想文」から抜粋したものである。
- 2) 「ウェディングケーキモデル」によれば、17の達成目標が「①経済」「②社会」「③自然環境」の3分野にグループ分けされている (井田ほか2021, 7頁)。しかしながら、小稿では受講生の「感想を分析し考察する」方法として、3分野以外に「④その他: 目標達成の是非」を加えた。なぜなら「目標17: パートナリーシップで目標を達成」の背景にはは、現実問題として「2030年には達成が困難である」など、「厳しい意見」「SDGs批判」も存在するからである。おそらく2030年までには目標達成はできないが、2030年はあくまで「ゴール」ではなく「通過点」としてとらえ直す必要があると考えられる。
- 3) ただしこの分類 (5つの傾向) は筆者の主観によるものである。
- 4) 原文が「です・ます」調の文章は、「である」調に書き換えている。また長文は短くし要約した。筆者の判断で選択して「例」としてあげている。
- 5) これは大阪商業大学の公共学部目標である、“NGO・NPO活動で将来活躍する人材養成”と密接に結びついているため、学生諸君の意識も高く反応が良かった。

## 文献

- 秋山宏次郎監修, バウンド著 (2020) 『こどもSDGs』カンゼン
- アレックス・ヘイリー著, 安岡章太郎ほか訳 (1977) 『ルーツ上・下』社会思想社。なおこの原作はテレビドラマ化されていて、DVD「ルーツ」ワーナーホームビデオ社 (2005年) となり、映像としても教材に使用可能である。
- 井田仁康ほか (2022) 『私たちの地理総合—世界から日本へ—』二宮書店
- 稲盛和夫 (2001) 『稲盛和夫の哲学—人は何のために生きるのか—』PHP
- 金坂清則ほか (2020) 『中学校社会科地図』帝国書院
- コール智子 (2022) 『おやこではなす, はじめてのSDGs』日本能率協会マネジメントセンター
- 齋藤幸平 (2020) 『人新生の「資本論」』集英社新書
- 澁澤文隆ほか (2022) 『標準高等地図—地図で読む現代社会—』帝国書院
- 清水健二・すずきひろし (2018) 『英単語の語源図鑑』かんき出版, 110



地理教育で SDGs（持続可能な開発目標）はどう教えればよいのか（西岡）

中村哲（2007）『医者用水路を拓く－アフガンの大地から世界の虚構に挑む－』石風社

深井宣光（2021）『小学生からの SDGs』KADOKAWA

## How to Teach SDGs in Geography Education: Thinking from the Reactions of University Students : Liberal Arts Lecture of Geography

NISHIOKA Naoya\*

SDGs have been introduced into school education at the urging of the United Nations. Textbooks list “17 goals” and elementary, junior high, and high schools report on educational practices and research on teaching materials, mainly in the field of social studies and geography. However, because the goals and contents are wide-ranging, it places a heavy burden on teachers who implement it. I have also come into contact with the SDGs in my university liberal arts course “geography” but I have had a difficult time focusing on the topic. In this article, I would like to discuss the future of SDGs education while organizing the reactions of the students listening to my lecture.

**Key words:** 17 goals, grouping of goals, reactions of university students, examination of SDGs concept

---

\*Faculty of Public Affairs, Osaka University of Commerce      E-mail : nishioka@daishodai.ac.jp